

# 新作 淨瑠璃

## 同じく 新作曲

近松門左衛門が義太夫の爲に每興行必ず新作を興へて以來、その後の舞臺は殆んど新作ばかりを上演した。その例外として、好評を博した狂言を二度演ずる場合は、わざ／＼斷り付きの口上を掲げてゐるくらいであつた。それが寶曆明和と斯界が漸衰するにつれて、作者の力も衰へ、たま／＼近松半二出づと雖、取り立てゝ創作力の勝つたものはなく、たいていは古い狂言の煎じ直しや焼き直しに過ぎない、天保に入つてから、やつと山田案山子の『生寫朝顔話』『梅魁倉八總』(八大傳の翻案)『浦嶋太郎倭物語』などが出てゐる。さうした衰滅期に新作の現はれない状態が、一度び名人三代長門太夫が擡頭するに及んで、維新前後から明治へかけて、ちよい／＼新作物を散見するに至つたのは甚だ理由あることだと思はれる。



本正入繪の「總八答魁花」

太夫の雅號、(松長の松は長門の家が、若松家といふ杜若の名所と云はれた河堀口の料亭の名から 長は長門の一字) 玉和軒は長門の腰巾着とも云はれる人で、チャリ語りの竹本多満太夫のこと、要するところ、此淨瑠璃は江戸の講釋種で誰れかゞ作つたものに、長門が多少の改作を施して作章したものでらうと推測される。作曲の方では近代の名人二代豊澤廣助がある(代々廣助中の第一

嘉永五年九月、道頓堀竹田の芝居で、その長門太夫が江戸から歸阪して來ての、お土産狂言に『花雲佐倉曙』の新作淨瑠璃がある。而かもこの宗五郎住家は好評だつた。作者は佐久間松

長軒、登與嶋玉和軒とあるが、佐久間松長軒は、佐久間傳次郎こと三代長門



本正入繪の「曙倉佐雲花」

人者) 通名を『新らし屋』と云はれたほどで、後年京都の祇園町に住んで、専ら新淨瑠璃の節附をやつた。(文化——天保)

初代鶴澤勝七(西宮勝七)も節附の上手。

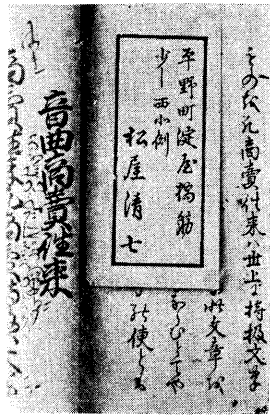
この他三味線の方には流石に作曲家が尠くはなかつたが、太夫としては、長門太夫などは文才もあり、可なりな學問もあつたから、作曲も巧い方だつた。

長門の弟子五代彌太夫(堀江の大師匠)も其遺風に化せられて、淨瑠璃の新作も書けば、作曲もやつた。

『明治美談孝行娘』眞言阪裏長屋の段『浪花葎芦噲聞書』古畑兄弟争ひの段『遠征旅行日本譽』福嶋少佐邸『四つ谷怪談』お岩稻荷の段『戀八卦昔曆』眞如堂の段『日露戰爭薰梅忠義魁』梅原留守宅の段(村松柳江との合作)『善光寺靈驗記』善光住家より善光寺まで

『邯鄲曲短夜夢』(錦秋園十三原作 彌太夫補作)『義士傳おかる注進』『義士傳彌作鎌腹(増補作)』『同浅草門前』『増補佐倉曙』儀作切腹の段。其他滑稽物頗る多く、それは前項チヤリ淨瑠璃の條に述べたが、就中『猫戀風雅妾宅』妾宅戀猫の段有名。『五代友厚實川延若冥途嘶』閻魔の廳の段の如きは當時大評判であつた。總て新作補作の類四十餘種新しく作曲した物は殆んど際限なき程。

更に忘れてはならないのは初代鶴澤清七(文政九年歿)で、俗に松屋清七と云ふ、古來の三味線の譜を整理統一して符章を設定し今日に範を垂れた所謂斯道の篤學者であり大恩人である。



(屋松)七清澤鶴代初  
「來住實商曲音」章作

第一條 我同盟淨瑠璃三業ノ仲間タルヤ忠臣孝子貞女烈婦ノ外傳ヲ三条ノ絃ニ合セ奏シ木偶ヲ以テ其形容ヲ擬シ場ヲ開

キテ之レヲ演ズルヲ業トス則チ其外傳ヲ演ズルモノ其三絃ヲ彈ズルモノ其木偶ヲ操ルモノヲ以テ合セテ三業トイフ

第二條 政府御布令ノ趣堅ク相守ルベキハ勿論仲間申合セ確守シ總テ正直ニ營業スベシ

第三條 仲間タルモノハ營業新古及ビ練磨不練磨ニ因リ至當ノ等級ヲ定メ成規ノ手續ヲ經テ營業鑑札ヲ受クルモノトス

第四條 同盟仲間ハ天第百八十一條ノ御布達ニ基キ投票ヲ以テ取締ヲ選舉スベシ

第五條 選舉サレタル取締ハ互ニ投票を以テ總代一名副總代一名ヲ選舉スベシ

但シ取締中協議ノ上總代置カザルモ可トス

(五)